

「ヒトはなぜするのか」

ナイルズ・エルドリッジ著、野中 香方子訳

ヒトはなぜするのか



栄養摂取、呼吸、循環、排出排泄、セックス—もしこれらの中でなくても生きられるものとは問えば、間違いなくセックスだろう。だが他の活動を司る細胞は、そのセックスの行為(受精)からしか誕生しない。つまり「体細胞」と「生殖細胞」には根本的な役割の違いがあり、奇妙なねじれの中で私たちは生きています。著者はそれを経済的活動と繁殖活動とし、ヒトは生物の中でも、特にその両者の間に開きがある存在であるとする。それを基本にやや学術的に、ヒトは何の目的でセックスをするのかを論じていったのがこの本だ。分かりやすいのは子づくりの例だ。多くの生物ではセックス、生殖、経済的活動は表面上、混然一体となって進行する。経済的成功者(なわばりの広いもの)が貧しい層より子どもの数は当然増えることになる。だがヒトは金持ちの方がむしろ子どもが少ない傾向に

生態系に縛られないセックス

あり、たちまち遺伝子を残すための競争原理では説明がつかなくなる。

その一因として著者は、米や麦の栽培、動物の家畜化らによりヒトが、地域生態系に縛られず、むしろそこからはみだす存在となったことを上げる。もちろん自己を客観視し、相手の思考を想像する(自我)のおかげで、豊かな文化や複雑な社会を生み出しつつ、他の生物には見られない「性」の形態、果てはレイプや戦争時の暴行といったものまでつくりだした。つまり、文化や社会的側面がヒトのセックスには大きくかわり多面化しているとするのが著者の考えだ。その例でいえば中国が、自国の「一人っ子政策」に対して反日デモのような行動をした話は聞いたことはなく、それも種としてのヒトが歩んできた歴史を物語っていることになる。

著者はあくまで遺伝子は「器」であり「意志」ではないという立場を通す。「性」に限らず「負」の側面を直視しながら有限な人間が、より長い生命を持つ遺伝子を特別視するとき、そこに、寄りかかり責任転嫁しようとする姿勢がありはしないか。著者の執筆の思いは、実はその点にもあるようだ。

評・宮本誠一(小規模作業所「夢屋」代表)

▲講談社インターナショナル・1680円